

SUNDAY WIDE

日曜ワイド

恐竜化石の研究を行う岡山理科大(岡山市北区理大町)の生物地球学部4年佐野佑さん(22)、木村朝陽さん(21)が、卒業制作で恐竜2体の全身骨格レプリカを完成させた。授業で

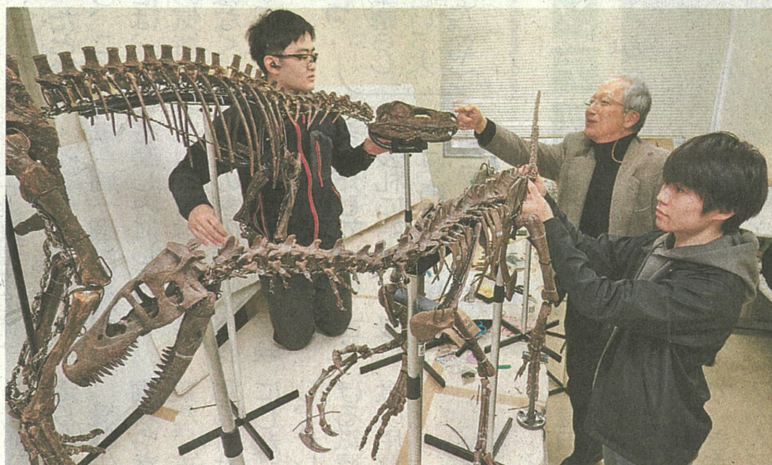
の使用や貸し出し展示を想定し、簡単に分解できて自在に姿勢も変えられる構造を考案。当面は学内の展示スペースで披露され、県内の博物館などにも貸し出す予定。(赤沢昌典)

恐竜骨格姿勢自在に

Sign Display Convention



岡山理大の佐野さん、木村さん卒業制作



2人は恐竜化石調査を主導する石垣忍教授(古生物学)の研究室で学んでおり、昨年7月から制作を進めていた。恐竜の全身骨格レプリカは、2018年度の卒業生が手掛けたアジア最大の肉食恐竜タルボサウルスに続き2、3体目となる。2体は二足歩行に進化したばかりの姿を

レプリカ2体 博物館貸し出しへ

残す初期の肉食恐竜ヘレラサウルス(全長3.5m、高さ0.9m)と、現代の鳥類に近い特徴があるドロマエオサウルス(同2.3m、同0.7m)。同大が既に所有する標本と合わせ、恐竜の進化過程が学べる代表的な種を選んだ。ともに約190個の骨(樹脂製)で構成し、骨のパーツは米企業から取り寄せた。骨格標本は従来、骨に鉄棒を通して固定するが、佐野さんは市販のワイヤをらせん状に束ねるなどして骨に沿わせる手法を考え、重さに負けない強度と曲げ伸ばしができる可動性を両立した。骨の彩色を担った木村さんは、海外の論文や同時代の地層から発見された他の化石を調べ、赤、茶など色を7層に重ねて出土時の風合いに近づけた。2人は県内外の博物館を訪れて展示方法を参考にし、互いの成果を教え合い制作を効率化した。今後は工程のマニュアル化を進める予定で、2人は「納得の出来栄。後輩にはフレーム制作、彩色をさらに洗練させてほしい」。指導した石垣教授は「よく工夫しており、どの部位を見てもその恐竜の特徴が表れている。授業や展示で有効活用したい」と話している。

木村さん(右)が姿勢を調整するドロマエオサウルスと、佐野さん(左)が組み立てを担当したヘレラサウルスの骨格レプリカ